大槻文彦をめぐって

後藤　斉

第16期有備館講座 「ハイブリッドな文化」

2017-08-26

大崎市　岩出山公民館（スコーレハウス）

概要

- 大槻文彦(1847-1928)は初の近代的国語辞典『言海』(1889-91)を著した。背後にある文法は『広日本文典』(1897)として公刊。日本と西洋の学問をうまく合流(折衷)させた。改訂増補の『大言海』は没後に完成。
- 「大河ドラマの主人公にふさわしい」との評も。
- 仙台藩の学者の家系で、父祖の地は一関。祖父玄沢は蘭学者、父磐渓は漢学者。文彦は江戸で生育。
- 「和漢洋を具微せる学者」。もともと英学を修業し、国学を独学。あまり知られていないが、実はマルチ人間。

大槻の英学(洋学)とは? 他の分野の活動との関係は?

1.　はじめに

- 小学館『日本大百科全書』

  国語学者。儒者大槻磐渓（ばんけい）の三男として江戸に生まれる。如電（じょでん）の弟。開成所、仙台藩養賢堂、三叉（さんしゃ）学舎などに学んだ。1872年（明治5）文部省八等出仕、英和辞書の編集にあたり、その後宮城師範学校校長、文部省御用掛などを歴任し、そのほか国語調査委員会委員などをも務めた。91年刊行完成の『言海』は、ウェブスターやヘボンの辞書を参照し、各語の発音、語の類別や語源、語釈、出典にわたって記したもので、国語の普通辞書として広く用いられた（のちに増補されて『大言海』になる）。また、その巻頭に付した「語法指南」に改訂を加えて97年『広日本文典』『広日本[文典]別記』を刊行したが、これは和洋の折衷文典として、文法学の基礎をなし、学校文法にも広く影響を与えた。このほか、国語調査委員会の『口語法』『口語法別記』の編集にもかかわるなど、口語研究にも新しい面を開いた。［古田東朔］

1.　はじめに

「大槻三賢人」像 (一関駅前)

「大槻文彦先生像」像
もとは吉野作造ら教え子が贈ったもの
1966年大槻家から仙台一高に寄贈

2. 大槻文彦と『言海』

- サンキュータツオ 『学校では教えてくれない 国語辞典の遊び方』角川文庫, 2016.

最初の近代国語辞典でありながら、その後の辞書のスタンダードな形を決定づけた。

いろいろなひどい目にあいながら、ようやく刊行した…… 涙なくしては語れない苦労があったのですね!

これから新しい国をつくっていくんだ、俺たちの手で! そんな熱量が『言海』からはにじみ出ています。

ぜひ高田宏さんの『言葉の海へ』という本をよんでください。大槻文彦が大河ドラマの主人公にふさわしいほど魅力にあふれた人物であることをおわかりいただける…

幕末から昭和にかけて生き抜いた知の巨人!

2. 大槻文彦と『言海』

『言海』(1889-91)

はじめ4分冊。全1240ページ (本文 1100ページ)、見出し語39103語。以後、さまざまな判型で増刷、補訂をともなう改版。昭和前期までの辞書の大ベストセラー、ロングセラー。1949年に第1000版。

現在

・ちくま学芸文庫, 2004 (本体2,200円+税)

・検索サイト

http://www.joao-roiz.jp/JPDICT/2

・国立国会図書館デジタルコレクション

http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/992954 (初版)

・Googleブックス

Googleで「言海」を検索し、「もっと見る」→「書籍」。1898年版を選択して「読む」。画面上で閲覧、あるいはpdfをダウンロード。

3. 大槻文彦と『言海』

『言海』本書編纂の大意

(一) 此書は、日本普通語の辞書なり。凡そ、普通辞書の体例は、専ら、其国普通の単語、若しくは、熟語(…)を挙げ… 又、語字の排列も、其字母、又は、形態の順序、種類に従ひて次第して… 此書編纂の方法、一に普通辞書の体例に拠れり。

(二) 辞書に挙げたる言語には、左の五種の解あらむことを要す。

発音、語別、語原、語釈、出典

(四) 辞書は、文法の規定に拠りて作らるべきものにして、辞書と文法とは、離るべからざるものなり。而して、文法を知らざるもの、辞書を使用すべからず、辞書を使用せむほどの者は、文法を知れる者たるべし。

3. 大槻文彦と『言海』

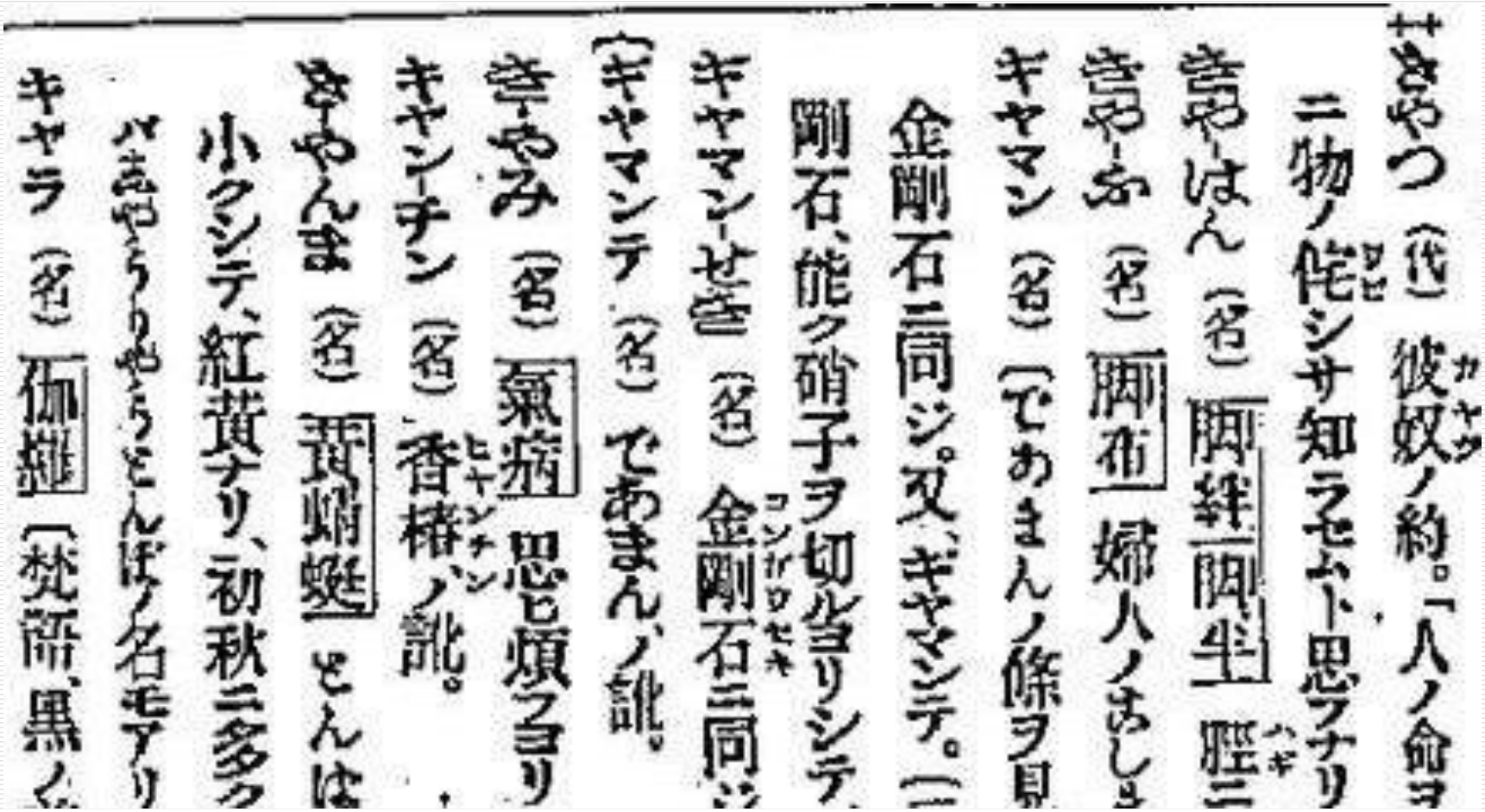
「語法指南」

西洋諸国の文法は、大率、羅甸の文法に倣ひて作りしものなりと云う。……されば、英の動詞にいへる可成法、接続法は、その語体には具へぬを、…羅甸の法に擬して作為せるなり。是等は、英の語学者が無用の模擬といふべく、既に、其国の学士中にもこれを法ならずと論ずるあり。……

英文法の如きは羅甸文法の模擬に出でたるもあれば、重複変化の不都合もあれど、羅甸文法の如きは、一動詞の変化に、法も、口気も、時も、具備するものなれば、然る紊乱の不條理なく、又、初より、其国語の天性に随ひて立てたる文法なるべければ、然る不條理の起るべき謂はれも無かるべきなり。畢竟ずるに、国語の特性を善くも推究せずして、徒に此を彼に合はせむとすればこそ、さる牽強説も起るなれ。

各国天然の言語に、各、差違あるべきは、理の応に然るべき所にして、其間に惑ひを入るるに足らず。唯、其国語天然の性に随ひて語法を制定すべきなり。

4.『言海』の工夫


彼奴ノ約。「人ノ命ヲ
ニ物ノ侘シサ知ラセムト思フナリ
脛巾
婦人ノ袴
金剛石ニ同ジ。又、ギヤマンテ。
剛石、能ク硝子ヲ切ルヨリシテ、
金剛石ニ同ジ
であまんノ訛。
氣病
思ヒ煩フヨリ
香椎ノ訛。
貫蝸蜒
とんぼ
小クシテ、紅黄ナリ、初秋ニ多ク
とんぼうのやうなノ名モアリ
伽羅
黒ク

4.『言海』の工夫

「柴ノ屋ノ、はひリノ庭ニ、置ク蚊火ノ、烟タルサキ、夏ノ夕暮」妹ガ家ノ、一ニ立テル、青柳ニ

はひ・る・ル・レ・ラ・リ・レ（自動）（規・一）這入ル、ノ約。入ル。

はふ（名）颪風〔或ハ破風〕屋ノ切棟ノ端、兩下シテ山形ヲナス處。圓ク下ヘ反リテ、鍬形ヲ倒ニシタルガ如ク作ルヲ、唐ートイヒ、大棟ノ肩ニ、小棟ヲ寄セカケテ作ルヲ、千鳥ートイヒ、又、梁行ノ榿ノ上ニ、尖レル破風ヲ起スヲ、障泥ートイフトソ。

はふ（名）覇府 武家將軍ノ政府。幕府。

はふ（名）法〔此字、漢音、はふ、呉音、ほふナリ、衆語ノ此字ヲ冠スルモノ、其慣呼ノ音ニ因テ兩部ニ分チ收ム、はふニ無キ語ハ、ほふヲ見ルベシ〕ノリ。サダメ。オキテ。法度。法律。テダテ。（法ノ條ヲ見ヨ）

はふ・ふ・フ・フレ・ヘ・ヘ・ヘ（自動）（規・一）這（一）手ト足トニテ歩ム。地ニ伏シテ行ク。パラバフ。（八二）匍匐（二）行ク。歩ム。（獸蟲ニ）蚊行（三）延ビ行ク。パビコリワタル。（蔓草ニ）延蔓

はふ・ふ・フル・フレ・ヘ・ヘ・ヘ（他動）（規・二）延 這ハス。延ベ引ク。張リワタス。「引板ハヘテ」綱、曳キハヘテ」絲、打チハヘテ」葉守ノ神ノ、標繩はふるマデ」

はふ（名）畏母ノ一種、黑クシテ青ミアルモノ。

ハフ（名）波布〔琉球語、蝮ノ轉カ、蛇ノ轉カ〕蝮ノ類、琉球諸島ニ產ズ、頭、飯匙ノ如シ、毒極メテ甚シ。飯匙倩

はふ・ぐ・く（名）法學 法律ノ學。

はぶかる・ル・レ・ラ・リ・レ（自動）（規・一）省〔被レ省ノ轉〕

4.『言海』の工夫

ちぶくら（名）乳脹　三味線ノ、棹ノ上、絲倉ノ下、左右ヘ圓ク脹レタル處ノ名。訛シテ、チブクロ。

ちぶさ（名）乳房　人ノ胸ノ左右ニ凸ク出デタルモノ、小キ頭アリ、乳首トイフ、男ナルハ低小ニシテ更ニ用ナシ、女子ナルハ大ク出ツ、兒ヲ生メバ乳首ヨリ乳汁ヲ出ス、兒ヲ哺育スルニ大切ナルモノナリ。獸ナルハ、胸腹ニアリテ、其數許多アルモアリ。

ぢぶしやう（名）治部省　ヲサムルツカサ。古ヘノ八省ノ一、吉凶ノ禮儀、雅樂、僧尼、及ビ、蕃人、陵墓ノ事ヲ掌ル。

ぢぶつ（名）持佛　常ニ身ニ持チ添ヘテ祈念スル佛體。

ぢぶつだう（名）持佛堂　持佛、又ハ父祖ノ位牌ナド安置シテ置ク室ノ名。祠堂

ヂフテリア（名）實布的里亞（Diphtheria.）馬脾風ノ條ヲ見ヨ。

（ちぶりのかみ（名）道觸神　旅路ニ、海、陸、共ニ、其路ニ行キ觸ルル所ノ神ヲ、手向ケスルニツキテイフ稱ナラムト云。「行ク今日モ、歸ラム時モ、玉鋒ノ、一ヲ、祈レトゾ思フ」

ちぶるひ（名）血振　婦人ノ產後ノ病。血暈

（ちへ（名）千重　アマタ重ナリタルコト。「白雲ノ、智幣ニ隔テル、筑紫ノ國ハ」

ちへい（名）治平　世ノ治リテタヒラカナルコト。太平。

ちへい（名）地平　大地ノ平面。

＋ちほ（名）路上ノ竊盜、すりニ同ジ。（大坂）

ちぼう（名）智謀　善ク慮リ得タル謀。

4.『

ざーをよく（名）座食 ヰグヒ。

さしよる・ル・ラ・リ・レ（自動）（規一）差寄 進ミ寄ル。

チカヨル。

さしれつ（名）差料 刀劍ノ、自ラ佩ル二供フルモノ。

さしわたし（名）差渡 此ヨリ彼ヘノ直ナル距離。ワタリ。徑 直徑

さしゑ（名）差畫 書物ノ中ノ處處ニ差シ加フル畫。挿畫

〔さ〕ど（名）杼首 柱ノ上ニ叉アリテ横木ヲ架クベキモノ。

さす・ス・セ・サ・シ・セ（他動）（規一）差（一）指ニテ其方ヲ示ス。ゼザス。指點（二）矢レト定ム。「日ヲ一」名ヲ一」指定（三）ココロザス。「西ヲサシテ行ク」向（四）使ニ遣ル。「純友カサウギノ時、追討使ニ差サレテ」敕使ニハ、少將高野ノオホクニトイフ人ヲさしテ」差遣（五）ササグ。カザス。「傘ヲ一」翳（六）將棋ヲ行フ。將棋（七）カタグ。カク。カツグ。「駕籠ヲ一」輿ヲ一」舁（八）突キ張リテ空ヘ上グ。サシアグ。ササグ。「石ヲ中天ニ一」擎（九）尺ニテ測ル。度（十）匣、机、ナドヲ作ル。（尺ニテ差シテ作ル意）（十一）差シ當テテ押スツツバル。「棹ヲ一」搾（十二）點火ス。「紙燭さしテ參レ」家刀自ニ松ささセテ」篝さし」點火（十三）加フ。雜ス。「紅ヲ一」朱ヲ一」點（十四）ソソグ。ツグ。加ヘ入ルル。「水ヲ一」油ヲ一」目藥ヲ一」智慧ヲ一」注（十五）向クル。勸ムル。「盃ヲ一」獻（十六）突キテ粘シテ捕ル。「鎖竿ニテ鳥ヲ一」（十七）他ノ動詞ノ上ニ、熟語トシテ、意味ナク用ヰル。「差シ遣ハス」差シ入ル」差シ加フ」差シ出ス」差シ迫ル」差シ急グ」差シ向クル」

さす・ス・セ・サ・シ・セ（他動）（規一）刺 〔指シ當ツル意〕（一）當テテ突キコム。（針、槍ナド）刺（二）螫ニテ毒ヲ行フ。「蜂ガ一」螫（三）針ニテ縫ヒツツル。「繡ヲ一」綱ヲ一」（四）疊ヲ作ル。（針ニテ刺シ作ル意）（五）閉ツ。トザス。（鎖、機ヲ刺シ入ルル意）「門ヲ一」戸ヲ一」鎖（六）貫ク。「鎖ヲ緡ニテ一」貫（七）佩フ。ブキバサム。（帶ノ間ニ刺シ入ルル意）「刀ヲ一」佩（八）ハサム。サシハサム。「花ヲ一」櫛ヲ一」簪ヲ一」挿（九）地ニ突キ入レテ根ヲ生セシム。「樹ヲ一」

さす・ス・セ・サ・シ・セ（自動）（規一）差（一）汐、上グ。（潮ノ條ヲ見ヨ）長（二）生ル。生ズ。「枝、一」若葉一」根、一」赤ミガ一」生（三）光、映リ入ル。「月ノ影、水ニ一」日ノ光、窓ニ一」明ガ一」映（四）浸ミ入ル。「水ガ一」浸入

さす・ス・セ・サ・シ・セ（他動）（規一）殘 仕遂ゲズシテ止ムル。シノコス。熟語ニノミ用ヰル語ニテ助動詞ノ如シ。「爲ル一」見一」讀ミ一」言ヒ一」閉キ一」散リ一」

さす・ス・セ・サ・シ・セ（助動）分 他ヲ使役シテ動作ヲ起サシムル意ノ助動詞。「受ケ一」懲リ一」着一」ノ如シ。（篇首ノ語法指南ノ助動詞ノ條ヲ見ヨ）

ざと（名）座主 比叡山延暦寺ノ長。

ざす・スル・スレ・セ・セ・セロ（自動）（不規二）座（一）スワル。ヰル。ヲル。（二）罪ニ當テラル。

第一表　動詞ノ語尾變化……法

規則動詞（終正）

	第一類（四段活用）	第二類（下二段活用）	第三類（中二段活用）	第四類（一段活用）	不規則 第一類（終變行加）	第二類（終變行左）
第一變化即本體	(一)(行)ゆく (二)(押)おす (三)(分)わかつ (四)(飛)とぶ (五)(讀)よむ (六)(去)さる	(一)(得)う (二)(受)うく (三)(任)まかす (四)(立)たつ (五)(掛)かぬ (六)(別)ふ (七)(飲)つとむ (八)(覺)おぼゆ (九)(忘)おそる (十)(植)うう	(一)(生)いく (二)(經)おつ (三)(匿)あふ (四)(煙)うらむ (五)(組)むくゆ (六)(感)おる	(一)(出)いる (二)(着)きる (三)(煙)にる (四)(怒)ひる (五)(見)みる (六)(居)ゐる	(終)す (原)おはす	(終)く
第二變化	ゆく おす わかつ とぶ よむ さる	うる うくる まかする たつる かぬる ふる つとむる おぼゆる おそる うう	いくる おつる あふる うらむる むくゆる おる	いる きる にる ひる みる ゐる	する おはする	くる
第三變化	ゆけ おせ わかて とべ よめ され む	うれ うくれ まかすれ たつれ かぬれ ふれ つとむれ おぼゆれ おそるれ うれ む	いくれ おつれ あふれ うらむれ むくゆれ おれ む	いれ きれ にれ ひれ みれ ゐれ む	すれ おはすれ む	くれ む
第四變化	ゆか おさ わかた とば よま さら む	え うけ まかせ たて かね へ つとめ おぼえ おそれ うえ む	いき おち あひ うらみ むくい おり む	い き に ひ み ゐ む	せ おはせ む	お む
第五變化	ゆき おし わかち とび よみ さり	え うけ まかせ たて かね へ つとめ おぼえ おそれ うえ	いき おち あひ うらみ むくい おり	い き に ひ み ゐ	し おはし	き

直說法（終止）Indicative mood.

分詞法（連體）Participial mood, or Verbal adjective.

接續法
- 已然 Subjunctive mood. (Perfect.)
- 未然 Subjunctive mood. (Imperfect.)

折說 Participle.

熟語 Compound.

名詞 General.

5.　文法の成立と発展 (西洋における)

(実用外国語学、文字教育)＋哲学的探究＋古典批評・注解

「古代ギリシャ人は、他の人々が当然のものと疑わないことに驚嘆する才能をもっていた」 ブルームフィールド

紀元前2世紀ごろ　ディオニュシオス・トラクス『テクネー・グランマティケー』(文法術)により古代ギリシャ語文法として成立。

古代ローマにおいてラテン文法として体系化され、ヨーロッパの知的伝統の基礎になる。ルネサンス以降、近代ヨーロッパ諸語に移植され、次第に個別言語に精緻化。現在でも「伝統文法」の中核として残る。

語中心の文法の主な手順

- 単語を認定すること
- 語類を設定して、その言語の全ての語を区別分類できるようにすること
- 妥当な文法範疇を立てて、単語の語形変化や、単語間の統語関係を記述・分析できるようにすること

（ロウビンズ『言語学史』から改変）

6.　大槻文彦の家系

祖父　大槻玄沢（磐水）（1757-1827)

蘭学者。杉田玄白、前野良沢に学び、芝蘭堂で多くの門人を育成。1794年から新元会(おらんだ正月)を催す。著訳書多数。『蘭学階梯』(1788. 蘭学入門書) 、『重訂解体新書』(1798成、1826刊)、『環海異聞』(1807成. ロシア帰還漂流民からの聴取記録)、『厚生新編』(1811-. ショメル『日用百科事典』オランダ語訳本から蕃書和解御用で共訳)、『金城秘韞』(1812稿. 慶長遣欧使節とその将来品の調査記録) 。

6.　大槻文彦の家系

父　大槻磐渓　(1801-1878)

儒学者、文章家。養賢堂学頭。蘭学を志したこともあり、西洋砲術を修得。『献芹微衷』(1849)などで早くから親露開国論を唱える。藩命でペリーの黒船を視察して報告の絵巻『金海奇観』(1854)を作成、建議書を幕府に提出。藩主の命で『彼理日本紀行』(1862)の翻訳を指導。戊辰戦争で仙台藩のブレーンとなり、会津藩追討回避などのため文書を起草。仙台藩の降伏の後に、入牢となるが、のち釈放。『孟子訳解』(1851)、『近古史談』(1854成)など。『呂宋国漂流記』(1845)も。

7.　マルチ人間大槻文彦

「自伝」

　私の学問がいかにも雑駁であると思はれよう。

　荒物屋の店のやうで、色々の品はあるが上等のものはない。

　専門の学をしなかつたのは一生の損であつた。

もちろん謙遜で、言語の学は多方面への関心と絡みあっている。

綿密な考証：歴史、地理地誌、洋学(日欧交渉史)、仙台(伊達藩)…

広い範囲での活動：翻訳、教育、出版印刷…

社会的発言もするが、態度はおおむね穏健(?)：　国境意識、かな文字論、言文一致など

7.　マルチ人間大槻文彦

英学に注目しながら、大槻の多方面にわたる活動を年譜と画像で概観しよう。

旧蔵書は主に宮城県図書館と早稲田大学洋学文庫に。他に、大槻如電旧蔵書は静嘉堂文庫、大槻家資料は一関市博物館に蔵。

国立国会図書館デジタルコレクション(http://dl.ndl.go.jp/)で多くの公刊編著書がインターネット公開(ダウンロード可)。宮城県図書館古典籍類所蔵資料、早稲田大学古典籍総合データベースでも著述・手稿などが公開(ダウンロード可)。国文学研究資料館近代書誌・近代画像データベース、国立公文書館デジタルアーカイブにも関連資料。Googleブックスや海外図書館等でも。